

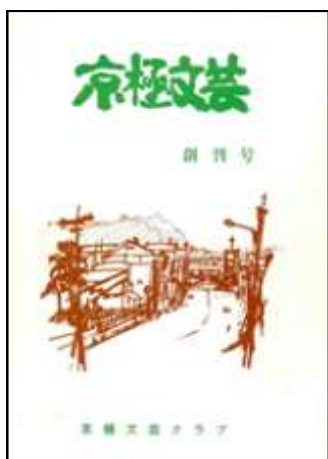
京極読書新聞 <第85号>

発行日 平成28年12月1日(木)
京極町生涯学習センター湧学館

「京極文芸」全15冊、復刻完了!

～京極文芸館 一年の歩み～

昭和48年から57年にかけて京極町で発行されていた同人誌『京極文芸』。
一年かけて全15冊を読みましたよ! (湧学館司書/新谷保人)



4月8日 (金) 第1回読書会

「京極文芸」が創刊されたのは昭和48年の12月。それから50年の歳月が経って、平成28年4月、「京極文芸館」という名の読書会がスタートしました。まず読むのは創刊号。定価200円。表紙カットは同人の尾川和彦氏。事務局長であり、編集責任者でもある針山和美氏は40ページに及ぶ創作『支笏湖』を発表しました。この創刊号から第3号にかけては、当時の京極町の会社・商店の広告が載っていることも大きな特徴です。町の雰囲気が入り込みと伝わってきます。

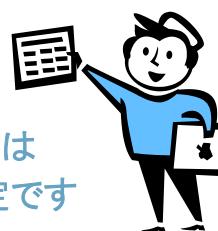
5月13日 (金) 第2回読書会

第2号、針山和美氏は『湖にて』を発表。また、これ以降の「京極文芸」を特徴づける「子ども作品の登用」がこの号から始まります。第2号では京極中学校生徒の読書感想文。第3号では学生作文というハイペースです。この他、第3号は、初めて針山和美氏の作品が外れ、代わりに当時の教育長・中川玄中氏の長編紀行『ふしぎな国インド』が登場したり、前田克己氏の連載『後志風土記』が始まったりと、「京極文芸」の新しい展開が見られます。



「京極文芸」復刻は、来年の製本教室(1/28(土)、2/4(土)開催予定)でもとりあげます。
詳細は京極読書新聞第86号でお知らせします。

京極読書新聞は
毎月1日発行予定です





6月10日 (金) 第3回読書会

針山和美氏の作品を軸に読み進めるため、6月は「京極文芸」第4号～第6号3冊の一気読みとなりました。「創作」（「京極文芸」では「小説」作品のことを「創作」と呼びます）関係では、第4号の針山和美『三郎の手紙』の他に、中川玄中『葛藤』、第5号に小城利春『海に鳴る乳房』と新しい書き手が登場します。ただ、俳句・短歌欄に顕著なように、発表者の固定化も起こりはじめてきます。創刊時の、誰もが詠う華やかさは消え去り、さらに発行ペースも1年に1冊がやっと…といった状態になってきました。4号以降、広告収入もなくなり少しさびしい「京極文芸」です。

7月8日 (金) 第4回読書会

毎号の表紙カットを描いているのは同人の尾川和彦氏です。毎号色を変えて、創刊号から第3号までが「町役場」風景、第4号と第5号が「羊蹄山」と続き、第7号からは「無意根」方向のスケッチに変わりました。第7号で針山和美氏は『女囚の記』を発表。金田小太郎氏の連載『開拓時代の思い出唄』も始まります。第8号では、岡田義明氏の連載『米国十六日の印象記』がスタート。



8月12日 (金) 第5回読書会

第9号。前田克己氏『後志風土記』第7回の「草相撲の人々」は反響が大きく、触発された文章が第10号以降続々と出てきます。金田小太郎氏の連載『開拓時代の思い出話（三）』、移民団がついに岩内浜に到着。「藤村徳治」（ワッカタサップ川上流に鉄鉱石を発見した人）が出迎え、羊蹄山麓まで道案内をするといった興味深い場面も登場します。

第10号は記念号。102ページの大冊です。針山和美氏は創作『敵機墜落事件』の他に、「『京極文芸』十号の歩み」という長文を載せています。また、この10号は「京極町児童生徒作品特集」を行っている点でもユニーク。小学一年生の詩・作文から針山氏の創作まで、町中の人々が勢揃いした姿はなかなかの壮観です。

9月9日 (金) 第6回読書会

第11号の発行が昭和54年11月。第12号の発行が昭和55年5月。次第に発行間隔が開いてきています。そのことと比例するかの如く、執筆者の固定化も続いています。

針山和美氏は第11号に創作『重い雪のあとで』を発表しました。この作品、ある小学校での「父兄参観日」の事件を皮切りに、教室での授業、職員会議の風景などがばんばん描かれている異色作です。そして、この作品が「京極文芸」に執筆した針山氏最後の作品となりました。

第12号で、おおっ！という新星が登場。「中学校の俳句指導で名の知られて」いるという阿部信一氏の同人参加です。『濃霧の里』という随筆を書かれています。この作品、後に雑誌「クオリティ」の第一回北海道ノンフィクション賞に輝くこととなります。

10月8日(土) 後志文学散歩 「支笏湖・洞爺湖めぐるバスの旅」

創刊号の針山和美氏の作品は『支笏湖』。第2号の『湖にて』の舞台は洞爺湖です。そんなこんなで、今年の文学散歩は千歳・苫小牧方面となりました。



11月11日(金) 第7回読書会

第13号の発行は昭和55年12月。今回も力作が2編です。一つ目が前田克己氏の『飛行機の飛んだ日(後志風土記⑪)』。大正5~6年のアート・スミスの北海道初飛行や大正8年の井上中尉「剣号」の飛行などを貴重な考察で解明して行きます。冒頭、余市に残る一枚の飛行機写真をめぐって余市の古老たちの記憶が語られるのですが、十人が十人とも記憶がちがひ細部がちがっていたのが大変印象的な作品でした。

二つ目が阿部信一氏。第12号の『濃霧の里』で鮮烈なデビューを果たした氏の快進撃は止まることを知りません。今回は『有島の大地』。後に有島武郎によって農場解放が行われることになる有島農場に小作として入った阿部一族の歴史が余すところなく描かれます。『カインの末裔』とはまったく逆の視角から書かれた「有島農場」は大変興味深い。貴重な作品です。

12月9日(金) 第8回(最終回) 読書会

第14号と第15号の読書会を一緒にしたのはにはわけがあります。二つの強力作品、「京極小学校お話クラブ」作品と阿部信一氏の小説『百姓の子』がこの2冊にわたって連載されているからです。どちらも間を空けず一度で読み切ってしまうということで、この今年度最終の読書会となりました。

まず「京極小学校お話クラブ」。針山和美先生がつくった作文指導計画では、1年生の4月から6年生の3月まで毎月ごとの指導計画がびっしり展開されていますが、まさに、子どもたちがこんな楽しいおもしろいお話が書けるまでに成長したという証明がここにあります。脱帽するしかありません。すごい仕事!

小説『百姓の子』。こちらも凄い。阿部信一氏は冒頭の書き出し文章をまったく同じに揃えて、第13号では『有島の大地』という随筆に、そして第14~15号では『百姓の子』という小説にそれぞれを仕立てるという大変器用なことをやっています。よほどの知性がないと、なかなかこういうことはできません。感心もし、感動もしました。





京中職場体験学習 ブックキャラバンで選んだ本が 書架に並びました！

9月15日～16日に行われた京極中学校・職場体験学習（2年生）。その時、ちょうどブックキャラバン（本屋さんが直接新刊書を持ってくる）の日と重なったので、本の選定もやってもらいました。現役の中学生は一体どんな本を選んだろう…と現役の湧学館職員も興味津々だったんですよ。

その本が10月に届きました。データを入れて、湧学館蔵書として必要な装備をして、今、新着図書コーナーに並べられています。たくさんの来館者がそれらの本を手にとって嬉しそうに借りて行きます。

『子ども部屋のアリス』、よく見つけたなあ。去年のアリス生誕150年を記念して久しぶりに出版された本ですけど、この本、作者ルイス・キャロルが生涯一番大切にしていたオールカラー版『不思議の国のアリス』なんですよ。

『かくれんぼケーキ』。「中からハッピーサプライズ！」と副題が付いたこの本、ページをめくると本当にいろいろなケーキの中に幸せが入っている！クリスマスにおすすめという「スノーフォレスト」ケーキは感動ものです。

他にも紹介したい本はいっぱいあります。ぜひ湧学館・新着図書コーナーで手にとってみてください。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

